

## ダブリン会議と2人の友と

井内 昇

1987年6月、ダブリン市で開かれた研究集会に出席した。この会議に出席することになったのは、主催団体のIGUの都市システム委員会の中心メンバーである、日本のA教授とカナダのB教授のお二人から誘われたからである。会議には15ヵ国から約40人が参加し、25編のペーパーが発表されたが、いずれも現在都市地理学の分野で活躍中の中堅、ベテランの発表だけに、連日中身の濃い討議が展開された。もし一人で参加していたならさぞかし疲れたことであろうが、英語を母国語のように操るA教授と一緒にあったし、委員長は昔同じ学生寮で暮らした気のおけぬB教授であり、さらに主催国オーガナイザーのC博士の行きとどいたサービスもあり、おかげで会議を通じて愉快的な時を過ごすことができた。

委員長のB教授は、筆者が昔、米国C大・大学院で学んだ時のクラスメートで、在学中、ガンマ・アルファなる名称のフラタニティ（学生寮の一種）で共に暮らした寮仲間でもある。当時彼はまだ20代半ばの紅顔の美青年であったが、教室での真剣な聴講態度、ゼミ発表時の周到な準備と要を得た発言、鋭い質問、或いは寮での紳士的な生活態度など好ましい印象が残っている。レポート提出前夜、徹夜でタイプを叩いていた姿の上に、休日にオンボロ車の助手席に女子学生をのせて大学の回りを走っていた姿がオーバーラップして目に浮かんでくる。この彼と再会したのは1980年IGC東京大会の折で、すでに40代に達していた彼はまだ昔のエネルギーを失わぬ一方、中年の雰囲気漂わせる若手プロフェッサーとして私の前にあらわれた。その後、1984年パリ大会での再会を経て今回のダブリンでの出会いとなった。颯爽としてあらわれた、といたいところだが、気の毒なことに空港から都心へ来る途中道に迷い、不良少年達にとり囲まれて現金、TC、パスポートをはじめ身ぐるみはがれる不運に遭い、さすがのB教授もいささか意気消沈の態であった。しかし、会議中、委員長の職責を全うしたのは立派であった。

A教授も大学地理学科のクラスメートで、爾來30余年のおつき合いを頂いている。私より若いが分別のあ

る紳士で、今回も成田を出発してから帰着するまで一緒に行動し、すっかりお世話になった。大学時代はごく普通の学生とお見受けした。4年生の時、卒論を書くためと称して、2人で信濃追分の民家の一室を借りて一夏を過したことがあった。まだ若かったAさんは、室内で腰を据えて資料や文献に目を通すよりは、屋外での行動の方が楽しいようであった。卒業後、第1回カナダ政府留学生としてT大・大学院で学び、その後ひき続きアメリカのP大学・大学院で学び帰国した。一方、卒業後、役所に入ったものの、連日の雑用にウンザリしていた筆者は、漠然と別の世界を考えはじめていた。その或る日、一時帰国したAさんと会った時、その余りの変り様に一驚した。嘗てのノンビリ学生は、今や研究に打ちこむ自信にあふれた地理学徒へと変身していたからである。今なら驚かないが、日本の大学しか知らなかった筆者にとって、Aさんをここまで変えた大学教育の場があることは信じられぬ位で、自分もそこで学びたいという思いが次第に強まっていった。怠け者の筆者が再び勉学をはじめ引金となったのは、このAさんとの再会で受けたショックの大きさであった。

Aさんは、現在母校地理学教室の重鎮としての職責を果たす一方、学界でもめざましい活躍を続けており、仲間としても頼母しい存在である。このAさんにさらに何かを望むとしたら、すでに50路も半ばに達した今、よりよき仕事をするために一層の健康増進につとめることであろう。30余年前の夏、信濃追分駅でたわむれにのった小荷物用の秤の針が大きく振れて以来の課題は、今や同年輩男性の共通のものとなっている。アイルランド旅行中、ホテル朝食時に「ウェイトウォッチャー」なるメニューを愛用していたことからすれば、要らざるおせっかいかも知れないが、いずれにしてもさらに体調を整え、日本の人文地理学発展のために活躍し、併せて怠け者の筆者を今後ともリードしてもらいたいと思っている。

牛に引かれて善光寺詣り、ではないが、2人の友にひ（惹？、引？）かれてのダブリン行であった。